

たくみ

Craftsmanship

特集 アジアとアフリカの民族工芸

第42号

世界経済の信用度と

沖繩の「わら算」のこと

アメリカから派生した「デリバティブ」といわれる金融派生商品の破綻がきっかけで、世界中の土地や株券や投資証券の価格が暴落し、為替相場も変動して輸出入も激減した。多くの企業が資産や販路を失い、リストラが加速してその対策に世界各国が大苦である。

日本でも円高にもかかわらず、株価や土地の著しい下落と対策の遅れで、国家経済の信用度は失われたままである。つまり生産と流通という実体経済が、金融派生商品などの電子商取引の過度なグローバル化によって、実体の何倍もの虚構の取引に飲み込まれてしまったというのが現実であろう。

ニューズウィーク誌によれば、いまアメリカの金融機関のもつ不良証券(トキシック・ペーパー…記録が不備なためその中身や所有者、価値や破綻リスクが確認出来ないもの)の金額は

数兆ドルにのぼるといふ。またそういった証券化商品の総額は世界全体で六百兆ドル以上になり、他の正常な資産すべての倍に達すると記している。

安定した経済活動を保証するのは世界に共通するルールや証書があるからだが、古代、ティグリス・ユーフラテス河畔のシュメール文明の時代に、人間は、印章と粘土板を使つて生産物や貢納の約束の証とし、その後、文字や数字が作られ今日に至っている。

しかし沖繩や東南アジアの一部、そして南アメリカのインカ文明やアンデスの辺りでは、わらや、草木の繊維を使った縄を結ぶことによつて約束事を表わし、あるいは税徴収の簿記として用いられてきた。沖繩ではそれを「わらざん」といふ。

これを实地に調査、研究した田代安定の『沖繩結縄考』によると、田代が調査した明治中期には、沖繩各地ではまだ「わらざん」が用いられていたという。(十二頁上段に続く)

たくみ特別展

アジアとアフリカの民族工芸

会期 平成二十一年三月二十八日(土)～四月六日(月)

三月二十九日(日)は営業いたします。

四月五日(日)は休業いたします。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(三月二十九日(日)と四月六日(月)は十七時半まで)



木彫品、縄文土器など
(ケニア・エチオピア・アフリカ)



編組品
(韓国・フィリピン・タイ・インドネシア・インド)

出品品目

陶磁 線刻酒瓶(中国)、縄文蓋壺(アフリカ)、彩陶絵皿(パキスタン)、棟瓦(朝鮮李朝)、その他。

染織品 イカットなど緋布、絞り染布、小物、その他(インド、スマトラ、センベス、スンバ、ネパール他)。

木漆工 足付箱、蓋物(インド)、藍胎漆器(ビルマ)、キリスト・聖人の彫像(フィリピン)。

編組品 箆、かご、手提、物入など(韓国、タイ、フィリピン、インドネシア、インド、アフリカ)。

雑貨 石像イコン(エチオピア)、石の香炉、鍋(朝鮮)、真鍮ポット(フィリピン)、カンナ(ロンボク島)、トンボ玉、首飾り(アフリカ)、その他。

アジア、アフリカはいま世界経済のグローバル化の中で苦しんでいます。民族の伝統的な生活文化も失われつつあります。そういった中で今回お目にかかる品々から、本来豊かであったアジア、アフリカの民族文化をいささかでも再認識していただければ幸いです。



線刻酒瓶(中国)



陶人形、くり抜き蓋物、革オイルポット



箱(インド)、木彫足付箱(ラジャスタン)



棟瓦(朝鮮李朝)

イカット(スンバ島)、絹絞肩掛け(スマトラ島)、
樹皮布(ミンダナオ島)、緋布(ティモール島)など



シヨルターバッグ、手提げ、ポシエツト、巾着、スリッパなど



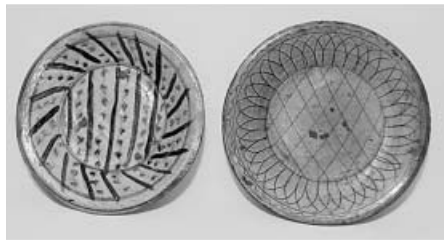
藍胎漆器 弁当箱(ビルマ)



貝象嵌カンナ(ロンボク島)



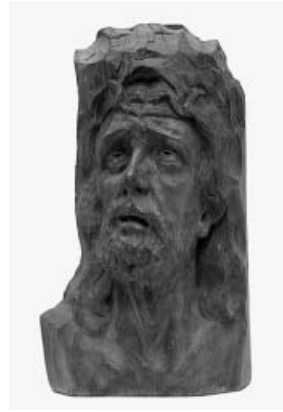
浮織飾布(インドネシア)



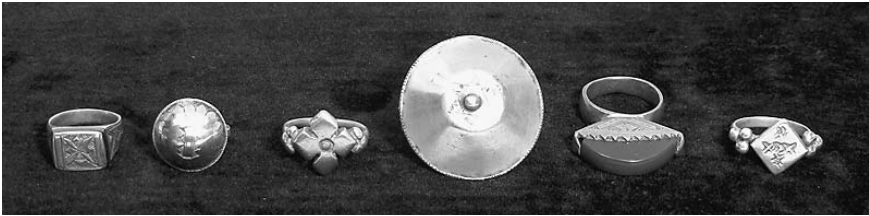
古陶絵皿(パキスタン)



木彫 聖人像 (フィリピン)



木彫 キリスト像 (フィリピン)



銀指輪、髪飾り (ニジェール)

羊皮スクロール(エチオピア)、銀コプトクロス、
石彫アイコン(エチオピア)



蒐集散策

— 和版本との出会い —

木村 太郎

「和版本」とは、わが国で版木に彫刻し、その版で摺った本。和紙を用い、和風仕立てにした本をいう。中国などの本を覆刻した日本版のものもふくむ



「禅海一瀾」上下巻二冊

と辞典では解説している。

私は若い時から書道に親しんで展覧会活動もしてきたので、必然的に書道に関する書物を多く架蔵しており、その中で和版本との出会いがあり、特に終戦後の一時期には東京神田の古書街に出かけると、思わぬ掘り出し物に遭遇した。そこで、私の架蔵本の中から数点を挙げてご紹介したい。

◇

「禅海一瀾」(上下二冊) 今北洪川著。

山口県・昌興蔵版(明治九年二月開版)

この本は、恩師・中村素堂先生愛読のもので、私ども弟子達に常に講義を聞かせて下さった事もあり、私も岩波文庫本を古書店から購入してテキストとして使用していた。前述の通り戦後間もない昭和二十三年頃、神田神保町の矢口書店の店頭陳列棚に無造作に並

べてあったものを購入した。

序文は、明治五年備前の曹源寺住職・儀山善来老師が書いており、自序として文久二年(一八六二)春に書いたものが前文に掲載されてある。本文は木刻活字版、弟子の福島宗璘が楷書体で書いた漢文である。

禅海一瀾は、儒仏の一致調和を説いた禅の名著として有名で、マルクス主義者の河上肇も座右の書物の一つとしていたと伝えられ、ゾルゲ事件の尾崎秀実も獄中から差し入れを頼んだ手紙が残されているなど、宗教・思想上の立場を超えて読まれたものである。偶然とはいえ、初版本が入手された喜びは大きい。

◇

「隸法彙纂」(十巻・全四冊) 清本翻刻、小鼓三房蔵版。

清の項懷述暢攷氏編録のもので、明治十四年一月に大阪で出版されたものである。天・地・玄・黄の四冊に編録されており表紙は黄色の染紙である。



「隸法彙纂」十巻全四冊と外袋

発売書林は、大阪・本町心齋橋の奎運堂・倉澤衿七より発売されたもの。内容は、顧諱吉の「隸弁」(隸書の辞典)の文字を「康熙字典」の部目に従い画引に改編したもので、分書を学ぶ者の便覧に供したわけであるが、「隸弁」の精華は多く損なわれている。首に乾隆四十五年(一七八〇)仲冬に書かれた自序が刻されている。書体辞典



「市川米庵遺墨集」(弊帚帖)

としては比較的こまごまに小型本(A5判)で、便利に使用している。この本も昭和二十五年に当時疎開先であった埼玉県桶川から東京世田谷下馬に漸く移り住んだ頃で、三軒茶屋近くにあった江口書店から購入し、東京に来た記念となるものである。私にとってこの頃から本格的な展覧会活動も活発になって、必要上多くの

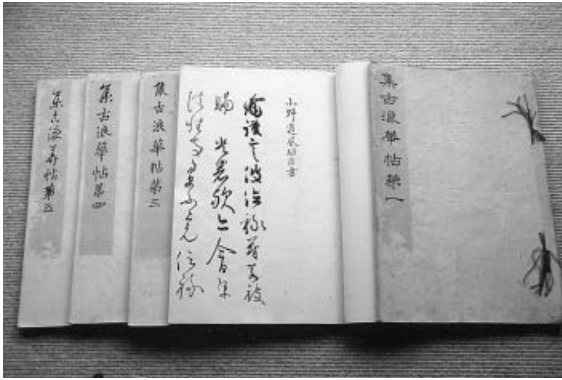
「書体辞典」の購入が始まった。なお、この本を購入した際、外袋つきであった。袋つきのまま今日まで保存されていた珍しい例である。

◇

「弊帚帖」(全一冊)。市河米庵書、青藜閣蔵版。

神田神保町の誠心堂書店の店頭から掘り出したものである。題簽に、「市河米庵遺墨集 全」と書かれてあり、表紙は蠟箋紙で改装されてあったが余りに汚染が甚だしく、一旦は購入を躊躇した。本の中を開いて見ると、米庵の書簡集と判り思い切って購入した。

流石に和漢書専門の店主らしく内容は熟知しており、「禅海一瀾」の場合と異なり売値は相応であった。本の末尾の箇所「郵嘉瑞刻」とあり、字彫り版木師として有名な木村嘉平(三代)と推定される。跋文に文政己卯夏五、文政二年(一八一九)門人三千謹識となっており、米庵生存中に発行された



「集古浪華帖」全五冊

もの。江戸浅草茅町の書肆・須原屋伊八から売り出されたものである。市河米庵は江戸後期を代表する書家で、巻菱湖・貫名海屋と共に幕末の三筆として名高い。因みに題名の「弊帚帖」は己の書を集めた手本であるので、筆者が謙遜して弊帚(やぶれぼうぎの意)と名付けたものである。現在は、



「草書・孝経」(唐・賀知章書)

私の手で昭和六十年四月に越前檀紙の茶染紙で改装して、自装本として大切に架蔵している。

◇

「集古浪華帖」(全五冊)。名筆の模刻帖である。ほぼ原寸大になっている。大和綴じの冊子本。表紙は全体に細かい布目打ちに見える白紙

で、小さな州浜と双千鳥丸文の文様が浮き出しとなっている。題簽は、黄染の短冊形の紙に隸・楷・行・草の四体で書かれている。

巻五の巻末に「文政二年(一八一九)卯十二月摸^レ勒(模刻と同じ)上木、浪華・森川世黄家藏」とあり、大阪の書家森川世黄(一七六三〜一八三〇)の手になったものである。版下は江戸の名工と知られる谷川清好の刻。

巻末目録の前に、篠崎小竹(一七八一〜一八五一)が序文を寄せている。内容は、「光定戒牒」「伊都内親王願文」「风信帖」「白氏詩卷」「恩命帖」等々の日本書道史上の名筆が揃っている。

いずれも世黄が粒粒辛苦の末に模写を終えたもので、小竹が序文の中で「不^レ失^ニ毫髮」と述べているように、比類なく精巧な仕上がりとなっており、写真版などのない時代によくここまで出版されたものと先人の労苦に頭の下がる思いである。また、これら名筆の当時における伝存状態を知る上でも極

めて史料価値の高いものである。この本も戦後の昭和二十年代に東京神田の山本書店で購入したもので、現在では稀観本となつてゐる。

◇

終りに和風仕立て本ではないが、「草書・孝経」、木綿布装帖仕立折本(一冊)。

古くから唐の賀知章(六五九〜七四四)の書と伝えられている「草書・孝経」一卷は、清代初め徳川五代將軍綱吉の頃、長崎に渡来したと伝えられている。

明治初年に帝室御物となつた。明治十七年に堀皆春が此の書を双鉤(そうこう)とり、木村嘉平(四代・一八五五〜一八八三)が辛苦の末にこれを刻したものの。「今文孝経」を前文章書で書写している。川田剛(一八三〇〜一八九六)の長文の跋がついているにもかかわらず、刻者名は省かれている。これが静嘉堂文庫蔵。木村嘉平刻の「賀知章・孝経」の模刻本である。

この原型本から鋼版として印刷されたものが、今日伝わっている市販の印刷本である。私が入手した本は題簽を日高秩父(一八五二〜一九二〇)が隸書で「秘閣搨本賀知章孝経」と書き、「大正甲寅春日(大正元年・一九一二年)」と署名した絹布が貼られたものである。一見、「木版本」とも見間違ふばかりで、書面に凹凸のある帖仕立てである。巻末に奥付もなく、どの様な経緯

エッセイ 食べ物三題(三)はもの皮

吉本 力

昭和三十六年春、受験のため東京で日本橋教会に泊めてもらつたことがあつた。私は、四人兄弟で上一人下二人は女ばかりで賑やかだったが、日本橋教会の家庭は五人兄弟だから、その賑やかさは、私の家族の比ではなかつた。

照子先生から耳打ちをされた。

で製本されたか不明である。ともあれ名工と謳われた四代・木村嘉平の刻したもので、この「賀知章・孝経」は特に名高い。

この頃は古書店を覗いてみても、これはと思う書物は少ない。書店主からも「品薄になりました」と言われる。私のような活字狂にとつては楽しみが減つたことを痛感している。

(東京民藝協会監事)

「ここは女ばかりなので、長作先生は、年頃の男の子が来るとうれしくなつて連れまわす。中でも、百貨店の食料品売場で味見をしてまわるので、少しでも離れていると大声で『これ食つてみる』と呼ぶから気をつけて」

案の定、宮城(長作先生にとつては皇居というよりは宮城といつたほうがピッタリくるようだった)のまわりのお濠ばたを一周した。二人で芝白金の自然教育園の中を歩いた。「ここは近くに弾薬庫があつたために、古き昔の

武蔵野の自然が、そのまま手つかずに残されたところなんだ」と解説して下さった。加えて「ここは静かなのでアベックがくるのに最適のところなんだ」と、大きな声で話したとたん、すぐその木陰に、ピツタリとくつついたアベックが居て驚いた。笑い出したのはアベックのほうだった。

先生からは、離れずに歩いた。幸い、私は食品売場で味見することを、恥ずかしいとは思わなかったのを、先生と一緒に味見をした。おかげで「おおい、こちらへ来て食ってみろ」という大声を聞くこともなかった。その日は、一日楽しい日だった。長作先生も、きつと楽しかったことだろう。

長作先生は百貨店の食料品売場を探検するのがお好きなようであった。大丸が八重洲口に進出したとき、早速、食品売場へ行つて、はもの皮を買ってきたそうだ。家人は皆、へびのようだと云つて嫌つたようだが、これはきゅりもみに入れると、滅法うまい。大

阪の人間にとつてはめずらしいものはなく、よく食べる。

京都では祇園祭の頃、はもの湯引きを、酔みそか梅肉につけて食べるのが、風物詩としてよく報道される。照り焼きもうまい。いずれも、はもの骨切り。といつて、皮一枚を残して、身だけに細かく包丁を入れていく。新米の板前が切ると、親方から「おまえのは骨切りではない、骨押さえや！」と叱られる。かといつて、深く切ると、皮まで切つてしまうのでむづかしい。

これは当然のことながら、皮も一緒に食べてしまうので皮は残らない。

大阪では、大阪湾でとれるはもが、蒲鉾の材料によく用いられた。骨が多いので、骨きり」という板前の技術がなかったら、身を食へることはできないが、蒲鉾ならば、皮だけをとつて、身も骨も一緒にすり身にして使えるので、うまい考えた。

さて、皮を捨ててしまわなかったのが賢いところで、たれをつけて焼くと、

直ぐには腐らないから扱いがよい。

長作先生はご自分が食べるためでもあつただろうが、それよりも、きつと両親に食べさせてあげたいという思いが、強かつたのではなからうか。きつと霊様へのお供えの気持ちで買つてこられたのだらうと、私は思っている。

そして天地の恵みとして、私たちの生命をつなぐために、生命ある生き物を食物として頂くとき、少しでも無駄にしないことが、どれほど神様のみこころに添うか知れないということをおいしそうに召し上がりながら、無言で示しておられたのではないだろうか。

「地球にやさしく」などという言葉があるが、人間中心の尊大な言い方のように思える。もつと謙虚に、すべてに礼を言う心、感謝の心をもつて、物を粗末にしない生き方を更に押し進めていくことが、二十一世紀の我々に大切なことであらうと思われる。

(さらさや主宰・大阪市)

サンナイ

三浦 正宏

北東北にはアイヌ語に由来する地名がある。そのむかし、北東北にはアイヌ語を話す先住民がいた。いま、わたしたちが暮らしている秋田のこの土地にも蝦夷(えみし)と呼ばれたアイヌの人たちが住んでいたのである。

やがて、和人と呼ばれたわたしたちの祖先が東北へ進出をはじめると、争いごとを好まないアイヌの人たちは、しだいに和人の手の及ばない山地へと移っていった。いまから七百年前とも千年前ともいわれる時代である。和人は先住民アイヌを追いやって自分たちの社会をつくっていったが、しかし移住の当初は、現地の風土に適應して発達した先住民の生活様式を見習い活用しなければならなかったはずである。特に移住者にとって新来地の地名は生活の基礎をなすものであり、すでに使われていたアイヌ語の地名を、アイヌ

を追いやった後も、地名だけはそのままアイヌ語の地名を使ったのである。

アイヌ語は文字をもたない発音だけの言語である。和人は、聞きよう聞きまねで「アイヌ語の発音」に「当て字」をして使った。たとえば、秋田のアイヌ語地名でいえば、先住民アイヌが「サラメムナイ(葦原の湧水の川)」や「キトウシ(ぎょうじゃにんにくの群生地)」と呼んでいた土地に、のちに移り住んだ和人が、「皿見内」や「木曾石」と当て字をして使ってきた地名が、いまも残っているアイヌ語地名なのである。

秋田には「サンナイ」という地名がある。秋田市北部の山内、旧河辺町岩見三内の三内、五城目町の山内などである。この地名がアイヌ語に由来するとすれば「サン」は「下りる」、「ナイ」は「川」の意味であるから「サン・ナイ」は、何かが「下りてくる・川」である。主語のない地名だが、いったい何が下りてくるのだろうか。

岩見三内の三内は岩見川と三内川の合流点、五城目町の山内は内川うちがわと富津内川つないがわの合流点で、どちらも洪水の名所である。秋田市北部の山内は、五筋の沢水が旭川に合流し、直線地で勢い、鉄砲水を出す所である。サンナイは、大水が下りてくる所なのである。

アイヌの古い考え方によれば、言葉(イタツク)の中には神(カムイ)が宿っていて、発した言葉どおりに物事が成る、と信じられていた。よい言葉を発すればよいことが起り、わるい言葉を発すればわるいことが起るといのである。アイヌの人たちにとって、発した言葉は重くて確かなものであり、それはむかしもいまも変わることがない。

サンナイという地名は、大水(ポロ・ワツカ)という言葉をあえて伏せて、水害が起らないことを願い、人々に注意を呼びかけた七百年の歴史のアイヌ語地名なのである。

(いわな文芸会員・秋田市)

世界経済の信用度と

沖繩の「わら算」のこと(二)

沖繩本島では主に個人契約のため、そして宮古島や八重山諸島では主に人头税徴収の簿記として用いられていた。明治時代まで、まだ離島では文盲も多く、筆記具もまだ普及していないとき、縄の結び方の変化で忘れやすい数を記録する方法は重宝であったろう。

そしてこの「わら算」は、何よりも当事者にとって絶大な「信用」を保証するものであったことも忘れてはならない。資本主義以前、世界のどこでも貨幣や土地の証書、決済の手形、契約の書類の偽造、変造は重大な犯罪であった。

日本でも平安、鎌倉の時代から、主に相続からむ訴訟や裁判が多く行われ、例えば鎌倉中期の女流歌人であり、十六夜日記の作者でもあった阿仏尼による、息子冷泉為相の領地相続問題訴訟にからむ鎌倉下向の話は有名である。

昔から地位や権利、信用に関する他者の介入や篡奪は名誉と生命をかけた争いの元であった。

ところが資本主義の時代になって、特にここ二十年、金融市場の自由化と政府による規制緩和によって、損をするのも得をするのも自己責任という無茶な時代になったのである。

しかし今回の世界の金融破綻によって大損したのは実は政府や資本家たちではないか。怪しげな金融商品などに縁のない一般大衆は雇用問題は深刻ではあるが、必ずや社会の健全化と再建のために立ち上がるであろう。

ところで日本民藝協会発行の雑誌「民藝」三月号では「竹富島のくらし」と題して今なお伝承されているこの島の、祭祀やくらしのさまざまについて特集している。グラビアでは美しい家並みや祭り、そして『わら算』も掲載されているのでご覧いただきたい。

・雑誌「民藝」は日本民藝館、たぐみなどで販売。
(志賀直邦)

あとがき

柳宗悦が、自らの心の遍歴の覚書として記した短詩形の文「心偈」は、多くが表具されて、たぐみでも頒布したことがある。私もその一つ「吉野山」の軸を桜の芽吹く頃に掛けるのだが、今年あらためてその偈の深い心を教えられ、勇気を与えられた。

吉野山

コロピテモ亦

花ノ中

柳はいう。人の一生は、きつと幾通りかの険しい坂道を通らねばならない。考えると、ころびつづけの身ではあるのだが、実はころぶその所が、花の上なのである。荒涼たる人の世は、万朶の吉野山であったのである。花に受け取られる身であったのだ、という。(S)

発行 株式会社たぐみ

東京都中央区銀座八四一—二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三—三五七—二〇一七

FAX 〇三—三五七—二一六九

振替 〇〇—一〇—二—三五六五九

定価 六〇円(税込)